

ポルトガル語の動詞 *ter* と *haver* について

坂 東 照 啓

## 0. はじめに

個々の言語には、使用される頻度の高さ、及び、使用される範囲の広さという観点から基礎的とみなされるような語彙が存在するはずである。そうした語彙のいくつかは、調査を行うまでもなく、日常生活を振り返ることによって経験的にもリストアップできる。ここで日本語の動詞について考えると、「する」、「ある」、「いる」、「なる」がすぐに挙げられるであろう。それでは、ポルトガル語の動詞はというと、*ser*, *estar*, *ter*, *haver* などがまず一致して挙げられるのではなからうか。

これらの基礎的なポルトガル語の動詞には、不規則変化をするということと、助動詞的に用いられることが多いという共通の特徴が認められる。このうち、英語の動詞 *be* に相当する *ser*, *estar* の2つについては、両者の意義、用法の違いが注目され、記述が進められてきた。ところが、*ter* と *haver* については、共通するような用法も見られるにもかかわらず、両者を比較、対照するような記述はなされていないようである。

確かに、*ser* と *estar* の使い分けは、英語を母語とする者だけでなく、われわれ日本語を母語とする者にとっても容易ではない。そのため、ポルトガル語教育という面からは、*ser* と *estar* の違いについては注目されやすく、その違いを説明することは最重要項目の1つとみなされる。これに対し、*ter* と *haver* の場合、実際に両者の使い分けが問題になることは多くない。そのため、ポルトガル語教育において、とりわけ初歩の段階で、*ter* と *haver* を比較し、その違いを記述するということが重要であるとは考えられず、この2つの動詞の関係についてあまり言及されることがなかったようである。

しかし、*ter* と *haver* に、どちらを用いても概念的な意味が変わらないような場合が存在することは注目される。そもそも *ter* と *haver* のそれぞれを区別し、特徴付けるような意義とはどのように述べられるのであろうか。本稿では、ポルトガル語の基本動詞である *ter* と *haver* の本質的な意味の

違いと両者の関係について考察したい。

## 1. 助動詞的用法

ポルトガル語において文法範疇としての助動詞を認める必要はないと考えられるが、*ter* と *haver* には、時間に関連するような意義を担う用法があり、この場合に助動詞とみなされている。ただし、*haver* については、特にブラジルの口語においてこの助動詞的用法は衰退傾向にある。

### 1. 1. 複合時制を形成する要素

時制は、動詞の語形変化のみによる単純時制と助動詞を組み合わせて形成される複合時制に分けられるが、この複合時制を形成する助動詞として *ter* と *haver* は用いられる。(以下、本稿で用いる略記号については、後に一括して掲げる)

- (1) Aquele rapaz tem gasto muito  
that-m-sg boy-m have-IdPS-3sg spend-Pp much  
dinheiro ultimamente.  
money-m lately

「あの少年は、最近大金を使った」

- (2) Eles haviam saído quando chegamos.  
they-m have-IdPI-3pl leave-Pp when reach-IdPP-1pl

「私たちが到着したとき、彼らは(すでに)出ていた」

- (3) É impossível que ela tenha  
be-IdPS-3sg impossible that she have-SbPS-3sg  
feito este vestido sozinha.  
made-Pp this-m dress-m alone-f-sg

「彼女がひとりでこの服を作ったということはない」

(1), (2), (3)に見られるような *ter* または *haver* (の活用形) と過去分詞の組合せがいわゆる複合時制である<sup>(1)(2)</sup>。

一般に、ここでの助動詞的要素としての *ter* と *haver* はいずれを用いても概念的な意味は変わらないが、*ter* より *haver* は文語的で、出現頻度も低いと述べられている<sup>(3)</sup>。実際、文章語においても、(2)のように *haver* が直説法未完了過去形で過去分詞と組む場合を除いて、*haver* が複合時制を形成する要素として用いられることは、規範的には正しいとされているものの非常に稀なようである。

### 1. 2. 未来を表現する要素

時間的に未来を表現する形式として、ポルトガル語には単純時制としての未来時制が存在するが、それと共に助動詞を用いる迂言形も存在する<sup>(4)</sup>。その迂言的表現形式としては、*ir* の現在形を助動詞として用いる形式が普通まず第1に挙げられるであろうが、*haver*, *ter* も未来時を示す形式の助動詞として用いられる。

- (4) Hei de ler, mais tarde, o  
have-IdPS-1sg of read-If more late the-m-sg  
seu nome nas colunas dos  
your-m-sg name-m in+the-f-pl columns-f of+the-m-pl  
jornais.  
newspapers-m

「後で、私は新聞紙上にあなたの名を読むでしょう」

- (5) Há de surgir, na campina,  
have-IdPS-3sg of appear-If in+the-f-sg prairie-f  
o trigal maduro.  
the-m-sg wheat-field-m mature-m-sg

「十分生育した小麦畑が平原に現れるでしょう」

- (6) Eu tenho que escrever uma carta.  
I have-IdPS-1sg that write-If a-f-sg letter-f

「私は手紙を書かなければならない」

- (7) Você tem de ajudar o Pedro.  
you-sg have-IdPS-3sg of help-If the-m-sg Peter

「あなたはペドロを助けなくてはなりません」

*haver* の現在形+*de*+不定詞は、単純時制の未来形に比べ強意的で、決意、推量を表わす<sup>(5)</sup>。もっとも、単純時制の未来形も歴史的にはラテン語の *habere* (>*haver*) の現在形が不定形に後続して成立している。このことから、*haver* には元来未来を指向するような意義があるのではないかと考えられる。一方、*ter* の現在形+*de/que*+不定詞では、義務が明確に表わされる<sup>(6)</sup>。

## 2. 主動詞としての用法

*ter* と *haver* はともに本動詞としても用いられる。一般的にも *ter* は所有を表わす代表的な動詞として、そして、*haver* は存在を表わす代表的な動詞として知られている。しかし、*ter* は、現代のポルトガル語で、特にブラジルの口語において、存在を表わす動詞として頻繁に用いられており、逆に、*haver* には、現代では廃れているが、所有を表わす用法も存在した。

### 2. 1. 所有を表わす場合

本動詞としての *ter* は基本的に所有を意味する動詞とみなされている。

- (8) O            tío            de João tem            uma  
the-m-sg uncle-m of John have-IdPS-3sg a-f-sg

velha    casa    em Paris.  
old-f-sg house-f in Paris

「ジョアウンの叔父はバりに古い家を所有している」

- (9) Não tenho            tempo para ir    ao  
not have-IdPS-1sg time-m to    go-If to+the-m-sg

teatro    esta    noite.  
theater-m this-f night-f

「私は今晚劇場に行く時間がない」

- (10) Ele tem            um    bom            advogado.  
he have-IdPS-3sg a-m-sg good-m-sg lawyer-m

「彼にはよい弁護士がついている」

*ter* が示す所有の対象には (8), (9) からわかるように、具体的なものも、抽象的なものもなりうる。さらに、(10) のような場合であっても、彼がある腕利きの弁護士そのものを所有しているとは言い難いが、そうした弁護士に依頼することができる状態を「所有」していると解釈され、広い意味ではここでも *ter* は所有を表わしていると言える。

この *ter* が所有を表わす文の基本的構造を簡単に示すと、(11) のようになる。

- (11) [<sub>S</sub> NP<sub>sub</sub>    *ter*    NP<sub>obj</sub>]

(11) で、NP<sub>sub</sub> は所有者を表わす主語名詞句であり、NP<sub>obj</sub> は所有物を表わす目的語名詞句である (なお、S = 文)。

このような所有の意味を表わす場合、*ter* に代わって *haver* が用いられることはない。現代のポルトガル語では、*haver* が所有を表わす主動詞として用いられることはなくなっているのである<sup>(7)</sup>。

## 2. 2. 存在を表わす場合

本動詞としての *haver* は、基本的に存在を意味する動詞とみなされている。

- (12) Há            um    hotel    aqui perto.  
have-IdPS-3sg a-m-sg hotel-m here near

「この近くにホテルがある」

- (13) Há            três flores    vermelhas sobre  
have-IdPS-3sg three flowers-f red-f-pl on

a mesa.  
the-f-sg table-f

「テーブルの上に 3本の赤い花があります」

この *haver* が存在を表わす構文において、存在物である名詞句はどのような文法的機能を担っていると考えられるのであろうか。

(12) では存在物である名詞句 (*um hotel*) が単数であり、(13) ではその名詞句 (*três flores*) が複数である。しかし、*haver* はいずれの場合も 3 人称単数形 (*há*) で、存在物を示している名詞句の数には一致しない。(13) に対して (14) は不適格な文である。

(14) \**Hão* três flores vermelhas sobre a mesa.  
have-IdPS-3pl

しかし、*haver* と同様に存在を表わす動詞 *existir* の場合であれば、存在物の名詞句の数に従って変化する。

(15) *Existe* um hotel aqui perto.  
exist-IdPS-3sg

(16) *Existem/* \**Existe* dois hotéis aqui perto.  
exist-IdPS-3pl two-m hotels-m

ポルトガル語の動詞の数（及び、人称）は常に主語と一致するので、*existir* が存在を表わす構文において、存在物を示す名詞句は、自動詞である *existir* の主語と考えられる。これに対し、*haver* が存在を表わす構文では、存在する物を表わす名詞句は *haver* の主語であるとは考えられない。なぜなら、存在物を表わす名詞句が複数であっても *haver* は 3 人称単数形で、存在物の名詞句と数の一致が起こらないからである。従って、存在を表わす *haver* は、自動詞ではないと考えられる。つまり、この場合の *haver* は他動詞であり、存在物を表わす名詞句はその目的語として機能しており、音形を持つ主語は存在しないとみなされるのである。

上の考察から、*haver* が存在を表わす文の基本的構造を簡単に示すと、(17) のようになる。

(17) [<sub>s</sub> *pro<sub>sub</sub>* *haver* NP<sub>obj</sub> AdvP]

*pro<sub>sub</sub>* は音形を持たない 3 人称単数の主語名詞句、NP<sub>obj</sub> は存在する物を表わす目的語名詞句、AdvP は場所を示す副詞相当語句である<sup>(8)</sup>。

このような存在の表現には、特に現代のブラジルの口語では *ter* も広く用いられている<sup>(9)</sup>。

(18) *Aqui tem* dois relógios.  
here have-IdPS-3sg two-m watches-m

「ここに 2つ時計があります」

(18) のように、存在を表わす *ter* も *haver* と同じで、存在物を示す名詞句とは数の一致が起こらない。存在物を示す名詞句の単複にかかわらず、常に 3 人称単数形で用いられるのである。従って、この場合の *ter* も他動詞であって、存在物を示す名詞句は主語ではなく、目的語とみなされる。

## 2. 3. 「存在」を表わす構文と「所有」を表わす構文

2.1, 2.2 でも述べたように、*haver* を用いると文語的で、*ter* を用いると口語的であるという違いが認められるものの、*ter* と *haver* はいずれも「存在」を表わしうる。さらに、現代では廃れているが、「所有」を表わす動詞として、*haver* も *ter* とともに用いられていた。つまり、*ter*, *haver* のいずれもが「所有」、「存在」という 2 つの意味に関わっている（/いた）わけである。それでは、こうした「所有」を表わす構文と「存在」を表わす構文に何らかの関連性はないのであろうか。

まず、「所有」を表わす構文については、(11) に *ter* の場合を示したが、ここで *ter* を一般化し、動詞 *v* とすると (19) のようになる。

(19) [<sub>s</sub> NP<sub>sub</sub> V NP<sub>obj</sub>]

「所有」という概念が成立する状況では、所有者と所有される物が必ず存在すると考えられる。その所有者は、普通、人である。従って、典型的な「所有」を表わす構文における NP<sub>sub</sub> は人ということになる ((8), (9), (10) を参照)。しかし、(20) のように、人ではなく、無生物が所有者を示す主語名詞句の位置に生起する場合もある。

(20) Portugal tem muitos e bons portos.  
Portugal have-IdPS-3sg many-m and good-m-pl ports-m  
「ポルトガルには多くの良い港がある」

(20) ではポルトガルという国が擬人化され、所有が表わされていると考えられる。

次に、「存在」を表わす構文についても、(17) に *haver* の場合を示したが、ここで *haver* を一般化し、動詞 *v* に置き換えると、(21) のようになる。

(21) [<sub>s</sub> pro<sub>sub</sub> V NP<sub>obj</sub> AdvP]

「存在」を表現する構文では、存在する物だけでなく、その存在物がどこにあるのかという情報も必要となる。この場所を示す要素が AdvP として生起するが、ここで (20) が (22) のようにパラフレーズできることが注目される。

(22) Há muitos e bons portos em Portugal.

(22) では、(20) における主語 **Portugal** が、副詞相当語句 **em Portugal** として現れている。この (20) と (22) の違いは、**NP<sub>obj</sub>** が示している物に関する情報が、その所有者であるか、その場所であるかということから生じていると言える。つまり、**NP<sub>obj</sub>** で表わされている物の帰属先が、人なのか、単に場所なのかという差である。

### 3. 前置詞的用法

**haver** には、時間表現に先行し、時間の経過、期間を表わす用法がある。

(23) Vi o professor há quinze dias.  
 see-IdPP-1sg the-m-sg teacher-m have-IdPS-3sg fifteen  
 days-m  
 days-m

「15日前（＝2週間前）先生を見た」

(24) Há dez anos eu trabalho aqui.  
have-IdPS-3sq ten years-m I work-m here

「10年間私はここで働いている」

この時間表現を伴う *haver* は、常に 3 人称単数形で用いられ、時間関係を示すという意味上の特徴だけではなく、統語的な位置も名詞句の前という点においても前置詞的である。実際、(23), (24) は、それぞれ、(23'), (24') とほぼ同じ意味である。

(23') Vi o professor quinze dias atrás.  
ago

(24') Eu trabalho aqui por dez anos.  
for

しかし、この時間的な意味は、「存在」という意味から派生的に考えることも可能である。つまり、(23)では、私が先生を見たという事実が起こった時点から発話時まで15日という期間が「存在」している、また、(24)では、私がここで働いているという事柄が(10年前に生じていて、)発話時において10年という期間「存在」している、と解釈されうる。

このような時間関係を表わす場合、 **haver** に代わって **ter** が用いられることはない。

(25) Lúcia e Pedro se separaram há/\*tem/  
Lucia and Peter themselves separate-IdPP-3pl  
\*têm alguns anos.  
have-IdPS-3pl some-m years-m

「ルシアとペドロは数年前に別れた」

ter は時間表現を目的語にとって、その経過を表わすということがなく、前置詞的には用いられない<sup>(10)</sup>。

この構文は非常に特殊なようだが、時間表現が他動詞である haver の目的語で、この動詞句に対し節が主語として機能している構文と密接な関係があると考えられる。つまり、(23), (24) は、それぞれ (23'), (24') と同義である。

(23'') Há quize dias que vi o professor.

(24'') Há dez anos que eu trabalho aqui.

que が生起している (23''), (24'') は、(23), (24) に対する基本的な構文であると考えられる。なぜなら、(23''), (24'') から、haver が動詞ではなく前置詞として認識されて文全体が単文化し、主語節を導く要素であった que が脱落することによって (23), (24) が形成されていると考えられるからである<sup>(11)</sup>。

上に示した (23''), (24'') では que に導かれている節が haver の主語であり、この構文における haver は「所有」という概念と関連しているとみなしうる。すなわち、主語節の内容が、発話時から見て、目的語として表わされている期間を「所有」しているということである。具体的に解釈すれば、(19) の場合、私が先生を見たという出来事が、(その日から) 発話時までの15日間を「所有」しているのであり、(20) の場合、私がここで働いているという内容が、発話時までその内容が継続する10年間を「所有」している、ということになる。

ここでのように節を主語とする場合には、「人」が主語ではないので典型的な「所有」ではないが、広い意味での「所有」を表わしているともみなしうる。従って、一般に、現代では、haver は「所有」を表わすことはなくなっていると述べられているが、「所有」を表わす用法が完全に廃れているというわけではないのである。

## 5. 結論にかえて

haver と ter には、共通する用法も多いが、haver が人を主語とする「所有」構文に用いられない点、ter に、時間関係を表わす前置詞的用法がないという点で異なる。この haver と ter が表わしうる「存在」、「所有」という概念を考えると、「所有」より「存在」の方が基礎的な概念である。つまり、ある物が存在していなければ、それを所有することはできないということである。逆に、ある物に対し特定の所有者がいなければ、それは単に存在しているだけで、だれの所有にもなりうるという不安定性、変化性がある。従っ



て、主に「所有」を表わす **ter** の方が、**haver** より相対的に不変的、安定的な意味を持っているのではないかと考えられる。

[略記号]

<b>IdPS</b>	直説法現在	1	1 人称
<b>IdPI</b>	直説法未完了過去	3	3 人称
<b>IdPP</b>	直説法完了過去	m	男性
<b>SbPS</b>	接続法現在	f	女性
<b>If</b>	不定法	sg	単数
<b>Pp</b>	過去分詞	pl	複数

[注]

- (1) 複合時制における過去分詞は、主語と一致して性・数が変化することはない。
- (2) (1) は直説法現在完了 (**ter/haver** の直説法現在 + 過去分詞)、(2) は直説法過去完了複合形 (**ter/haver** の直説法未完了過去 + 過去分詞)、(3) は接続法完了過去 (**ter/haver** の接続法現在 + 過去分詞) とそれぞれ呼ばれる複合時制が現れている例である。なお、複合時制としては、これら 3 つだけではなく、直説法未来完了 (**ter/haver** の直説法未来 + 過去分詞)、直説法過去未来完了 (**ter/haver** の直説法過去未来 + 過去分詞)、接続法過去完了 (**ter/haver** の接続法過去 + 過去分詞) を加えた 7 つ、あるいはそれ以上を認めている文法書が多い。
- (3) **Teyssier (1989: 190)** には、「複合時制は助動詞 **ter** (または、**haver**) に過去分詞が先行されることによって形成される。現代語では、特にブラジルにおいて、**haver** は、書き言葉のある種の使用域における場合を除いて、もはや助動詞として存在しない。」と記述されている。
- (4) 意味的に未来時を示しうる時制は、未来時制だけではない。
- (5) 「**haver** の現在形+**de**+不定詞」は、ブラジルの口語ではあまり出現頻度の高い形式ではない。**ter de/que, dever** がこれに代わって用いられる。
- (6) 意思、推量、あるいは、義務を感じている主体は、主語ではなく、表現者である。(4)、(6) では主語と表現主体が同一だが、(5)、(7) では主語と表現主体が異なっている。
- (7) **haver** も近代までは所有を表わす動詞として用いられていた。**Cunha e Cintra (1985:527)** に、**António Ferreira (1528-1569)** の次の

ような例文が挙げられている — *Aos que o bem fizeram, hei inveja.* 「それをうまくやるような人を私は羨むだろう」

- (8) 場所を表わす AdvP は、存在を表わす構文にとって必要な構成要素である。つまり、文を完結するためにこの要素は不可欠である。
- (9) 規範的な文法では、*ter* が存在を表わす用法は認められていない。
- (10) この前置詞的用法は *haver* にのみ観察される用法というわけではなく、*fazer* にも認められる。*fazer* はさまざまな広い意味を表わす動詞で、「する」、「作る」、「させる」などを意味する。
- (11) (23) はさらに *haver*+時間表現の移動を伴っているとみなされる。

[参考文献]

- 安藤貞雄 (1989): 『英語教師の文法研究』 大修館。
- Bechara, Evanildo. (1987): *Moderna Gramática Portuguesa*. Nacional, São Paulo.
- Cegalla, Domingos Paschoal. (1987): *Novíssima Gramática da Língua Portuguesa*. Nacional, São Paulo.
- Cuesta, Pilar Vázquez. e Maria Albertina Mendes da Luz. (1983): *Gramática da Língua Portuguesa*. Tradução de Ana Maria Brito e Gabriela de Matos, Edições 70, Lisboa.
- Cunha, Celso. e Luís F. Lindley Cintra. (1985): *Nova Gramática do Português Contemporâneo*. Nova Fronteira, Rio de Janeiro.
- 黒川泰男 (1987): 『英文法再発見 (下)』 三友社。
- Kury, Adriano da Gama. (1987): *Novas Lições de Análise Sintática*. Ática, São Paulo.
- Luft, Celso Pedro. (1986): *Moderna Gramática Brasileira*. Globo, Rio de Janeiro.
- Sacconi, Luiz Antonio. (1990): *Nossa Gramática-teoria*. Atual, São Paulo.
- Teyssier, Paul. (1989): *Manual de Língua Portuguesa*. Tradução de Margarida Chorão de Carvalho, Coimbra Editora, Coimbra.